

# 韓國佛教學 SEMINAR

第三號

文武王と佛教	田村圓澄	(1)
高麗清規としての誠初心学人文	佐藤達玄	(19)
華嚴教判論	張愛順(戒環)	(35)
現代巫俗の比較研究	柳春姫	(53)
侍者 ĀNANDA	崔庚滿(淨印)	(27)
Karma and Economic progress	A. SUMANASARA	(1)
会員名簿および研究会報		

1987. 12

第四號

諸思想の対立と宥和	中村元	(1)
仏像にみる二つの姿	西村公朝	(7)
円測と法蔵	木村清孝	(15)
—教体論の関わりについて—		
義相の法諱考	金知見	(31)
—海東本華嚴の歴運をめぐって—		
韓国における葬送習俗の一考察	金永晃(禪晃)	(87)
永明延寿の浄土思想	韓京洙(宗澤)	(103)
会報		(119)

1990. 8

## 八世紀東アジア仏教研究への展望

吉津宜英

(駒澤大学教授)

### 一 元暁・法蔵融合形態の教学

私は本研究誌の第二号で「新羅の華嚴教学への一視点——元暁・法蔵融合形態をめぐって——」(一九八六年二月)と題して一文を掲載した。高山寺に伝えられ、『大正藏經』第七十二巻に収められている著者不明の『華嚴宗所立五教十宗大意略抄』(大正七二・二〇〇頁中)の大尾に次のような一種の系譜がある。

華嚴宗祖師

普賢菩薩 文殊菩薩 馬鳴菩薩 龍樹菩薩 堅惠菩薩 覺賢菩薩 日昭菩薩 杜順菩薩 智嚴菩薩 法蔵菩薩  
 元暁菩薩 大賢菩薩 表員菩薩 見登菩薩 良辨菩薩 實忠菩薩 世不喜菩薩 總道菩薩 道雄菩薩

これらの菩薩たちは『華嚴經』に出る普賢から始まり、中国の法蔵(六四三—七二二)を経由し、新羅の元暁(六一七—六八六)に至り、更に日本の良弁(六八九—七七三)を窓口にして道雄(?—八五一)にまで華嚴の伝統が伝えられたことを示している。道雄の年代から判断すると、この法系図は九世紀後半に成立したということになる。こ

八世紀東アジア仏教研究への展望

の法系は凝然（一二四〇—一三二一）などが述べている華嚴宗の日本伝来の系譜、すなわち、

杜順—智儼—法藏—審祥—良弁—実忠—等定—正進—長藏—道雄

といったものと重ざる点と、異なる面とを持っていることがわかる。

私は先の法系の中で法藏—元暁と並べられていることに疑問を抱き、この法系は何らかの意図を持ったものではないかと考えた。幸いにして、太賢と表員と見登の三者にはそれぞれ著作が現存しているので、太賢の『起信論内義略探記』一卷（大正四四卷所収）、表員の『華嚴經文義要決問答』四卷（統藏十二卷所収）、そして見登の『大乘起信論同異略集』二卷（統藏七一卷所収）の三つの著作を分析してみると、法藏の教学と元暁の文献とが並べて引用され、一体化されていることを確認した。このようなことは『華嚴經』のみを至上とする法藏の教学と一切の経論を和諍融會してゆく元暁との大いに差異のある両者の教学からは常識的には考えられないことではあるが、これだけの実例を見ては承認せざるをえないのである。そこで私はこの融合は一切を一心の下に和諍してやまない元暁をベースにして、法藏の別教一乘の教学を会入せしめたものであらうと考えて、このような太賢などのような教学に対して「元暁・法藏融合形態」と命名し、そのような形態の教学が良弁を通して、日本にも伝来したことを先の法系は示しているのではないかとこの仮説を提示したのである。

そのような仮説によって、この法系図の附してある『華嚴宗所立五教十宗大意略抄』の内容を見ると元暁の引用は見られないが、第五円教の別教一乘の所に『華嚴經』と共に『起信論』も併説されていて、これは法藏の「五教十宗」ではありえない内容、そして元暁の教学ならば当然ということであるから、この文献自体が元暁・法藏融合形態の一つの実例なのかもしれないとも判断したのである。

更にまた日本の大安寺の僧であった審祥（祥）が青丘（新羅）に留学し、多くの文献を将来し、帰国後、多くの人々に貸出し、書写の便宜に供したことが示されている。その「大安寺審祥師経録」を見ると、本当に元暁の著作の多

いことが知られる。そして、審祥自身も『華嚴起信観行法門』という著作を物したという伝承もあるから、彼もあるいは元暁・法藏融合の路線の人だったのではないかとも思われる。ただ、先の法系との関係でいえば、良弁は審祥に天平十二年（七四〇）に『華嚴經』の開講を依頼したことは事実であるから、今の「審祥師経録」の中に「華嚴宗祖師」の一覧表に出ている太賢、表員、さらに見登の著作への言及が一つも存在しないことには注目せざるをえない<sup>(3)</sup>。

このように「華嚴宗祖師」の法系図には名前が出ておらず、日本の伝統的な華嚴宗の系譜では日本の華嚴宗の初祖と称される審祥の教学はあるいは元暁・法藏融合の教学形態ではないかと推測する。ところで、この審祥に言及する<sup>(4)</sup>が、先のいずれの法系譜にも名を列ねていない人に寿靈がいる。この寿靈の『華嚴五教章指事』を見ると要所要所に、元暁の『法華宗要』などが引用され、まさに元暁・法藏融合の形態となっていることが明らかである<sup>(5)</sup>。

このように本研究誌掲載の先の小論では『華嚴宗所立五教十宗大意略抄』の大尾にある「華嚴宗祖師」という一種の法系図を手がかりにして、太賢や表員、そして見登などの著作の検討から、新羅仏教の中に元暁と法藏とを融合してゆこうとする形での教学の流れが存在し、その形態の教学は日本にも渡来し、審祥や寿靈に影響を与えているのではないかとこの仮説を示した。そして、東大寺造営と大仏建立の問題に関連させて、当時の私には『華嚴經』と『梵網經』との一異というテーマにも関心が生じていたので、法藏と元暁、さらに太賢の三者に共通したものとして『梵網經』の注釈書の検討を是非とも行いたいという希望を述べて、先の小論をしめくくっている。

## 一 『梵網經』諸注釈書の流れ

私は『華嚴一乘思想の研究』（大東出版社、一九九一年七月）の中で第八章として「法藏の『梵網經疏』の成立と展開」と題して論述した。先ず法藏以前の智顛、元暁、義寂、そして勝莊などの諸注釈と法藏のものとを比較し、一

点だけ目立った差異のあることを確認した。それは法蔵以前の諸師がいずれも『梵網經』と『華嚴經』とを関連づけたり、また一体視しているのに対し、法蔵のみは兩經を嚴密に区別しようとしていることである。公平にみて兩經を関連づけている諸師の態度の方が自然と思われるので、兩經の差異を示すことにやっきになっている法蔵に何らかの意図を感ずるのは当然といえよう。

そして、法蔵の注釈には確かに意図が含まれている。法蔵は師の智儼の教判や教学を継承しつつも、重要な部分で師との断絶を示す。それは師が同別二教対等を主張するのに対し、法蔵は別教一乘の優位を強調し、同教は『法華經』に配し、それは一乘を説くものの、内容的には三乘レベルと言わんばかりの論じ方である。法蔵は『華嚴五教章』で五教判を主張するが、その第五円教こそは『華嚴經』そのものの内容であり、別教一乘であるとし、ここでも『華嚴經』は円教と頓教とであるとすする智儼に相違している。

それでは何故に法蔵は同教を劣る教えと決めつけ、別教一乘をことさら高く唱えるのであろうか。従来は法蔵が玄奘のもたらした唯識仏教を三乘大乘として一乘に非ずと厳しく批判していることのみが注目されてきたが、私は法蔵が実は当時までの『華嚴經』以外の經論に拠る一乘大乘家たちに向って三乘大乘に対しての批判と比べて優るとも劣らない程の批判の意図を持っていることに気付いた。法蔵が具体的に批判している一乘大乘家たちを明示することはむづかしいことではあるが、私は『法華經』を重んずる天台の人々、『涅槃經』に拠る法宝のような人々、さらに唯識家であっても、真諦の教学を重んずる円測（六一三—六九六）のような人を批判の対象として想定してみた。彼らはいずれも一乘の最上の根拠として『法華經』を重視していることはいうまでもない。法蔵は『法華經』を重んずる風潮の中で『華嚴經』を至上とする教学を建立しようとしたのであるから、『法華經』に対する『華嚴經』の優位さを証明しなければならなかった。その証明の結果が先ほど述べたような別教一乘（第五円教）の優越と同教（三乘）の劣視という結果となったのである。

ところで、法蔵が『華嚴經』の至上性を主張するにあたって、最も批判すべき対象が新羅の元曉であったと思われる。元曉には『十門和讃論』という著作が存在したように一切の經論や諸の教学を和讃し、帰一せしめてやまない。元曉からすれば『華嚴經』も『法華經』も『梵網經』も『起信論』も、はては玄奘のもたらした唯識教学ですら和合せしめられる。このような一切を一体化せしめる元曉の一乘思想は、『華嚴經』のみを突出して優越と考える法蔵の別教一乘とは同じ一乘とはいいながら、まさに水と油の如く相容れないものであることは明らかである。

果せるかな、法蔵は『起信論義記』という一著を世に出して、元曉教学の全面的批判を展開したのである。よく法蔵は元曉の『起信論』の注釈をよく引用し、指南としたとか、先駆であるとか言われるが、それは事の本質を見えない。法蔵は元曉の注釈の文文句句を引きつつ、たんねんに元曉が『起信論』と『華嚴經』を一体視している所を無視するかのごとく、いわば切り捨ててゆく。また、『義記』には四宗判が出ていて、『起信論』の思想を如来藏縁起宗と呼んでいるが、その呼称すら元曉の教学を批判しようという意図を含んでいるのではないかと思う程である。

ただ、この如来藏縁起という言葉は直接的には法蔵教学の内部の問題に由ると言うべきである。すなわち、法蔵は『起信論』の教理といえども『華嚴經』にははるかに及ばない、前者は所詮如来藏縁起しか説きえていないが、後者は法界縁起を表わしているのであると主張したのである。もっと明らかに五教判で位置づければ、前者は終教からせいぜい頓教までの内容であり、後者の円教には遠く及ばないと言いたいのである。

しかしながら、法蔵の法界縁起説が『華嚴五教章』を見ても分かるように『起信論』などの真如隨縁の教理、すなわち如来藏縁起をベースにしていることは明らかであり、法蔵にとって『起信論』は大切な論書である。したがって、『起信論義記』という力作を物したのであり、古来『起信論』入門の指南書としての誉を得てきたのである。

それにもかかわらず、我々が『義記』を読むと『起信論』の内容を出来るだけ発揮しようという、いわば正の方向と同時に、元曉を批判しようとし、かつまた『起信論』を終頓二教に限定しようという教判的制約による、いわば負の

方向との二つの逆な動きを感じ、その二つの動きによって具体的な解釈の処々で一種の亀裂が生じているのを見る。いわば『義記』は『五教章』や『探玄記』といった『華嚴經』主張の日の当たる舞台を蔭で支えているというか、敵の上陸を防ぐ防塁の役割を担ったといえよう。

このように重苦しい役割を担っていた『義記』も後の宗密や太賢たちによって、その足かせ手かせを解かれ、『華嚴經』と『起信論』は同じレベルの内容と位置づけられ、自由自在に活用されている。

この『起信論義記』と同じ扱いを受けたのが法蔵の『梵網經菩薩戒本疏』（法蔵疏）である。法蔵は瑜伽戒を三乗の戒と決めつけ、この梵網戒を一切衆生に受持される「誰でも戒」として挙揚する。その方向ではオープンであり、正なる方向での發揮と考えてよいが、『華嚴經』からはむしろ三乗といわんばかりの限定が加えられ、いわば「これだけの戒」という負の力が加えられる。したがって、ここでも法蔵疏の文句の解釈はこれら正負二方向の力の動きによって亀裂が生れている。やはり、この法蔵疏も華嚴別教一乗高揚の蔭で働く黒子の役目を担っているといわざるをえない。

そのような法蔵疏も彼以降の人々からはそれぞれの教学上の立場からの批判は受けつつも、意外によく活用されている。大正八五巻所収の著者不明の『梵網經述記』では法蔵が批判する勝莊と法蔵とが共に依用され、法相の智周や天台の明曠はそれぞれ法蔵疏全体の姿勢には一言批判を呈しつつも、その実は大いに参照した跡を残している。また、華嚴の法流に属する法銑（七一八―七七八）が法蔵疏のように『華嚴經』と『梵網經』のけじめをせず、全く一体視していることは注目に値する。このことが、逆にいかに法蔵の『華嚴經』と『梵網經』との峻別の態度が強烈であったかということと別教一乗の主張が特異なものであったかということとを証することにも成るのである。

ところで、『梵網經』と『華嚴經』の一体化を二層推進したのが太賢である。彼は従来の法積家たちが二巻の經典の下巻からか、もしくは戒文の部分からか、いずれかで注釈を行っていたのに対し、現存のものとしては始めて上下両巻の注釈を著わした。特に上巻には『華嚴經』に類似の説示が多いわけであるから、太賢が上下両巻共に注釈したこと自体で彼が両經を一体化しようとしたことを知る。そして、彼は法蔵疏を良く依用し、『梵網經古述記』の冒頭では元曉の一心観に立って注釈する姿勢を出す。したがって、ここでも先の『起信論内義略探記』にみられたような元曉・法蔵融合の方向性を窺うことができる。この『古述記』に対して、いかに多くの注釈書が著わされたかについては既に精査されており、梵網戒が大乘戒の主流となつてゆくことにおいて、この太賢の『梵網經古述記』の果たした役割は大きかったと言わざるをえない。

さて、現存する日本での『梵網經』の注釈書としては善珠（七二三―七九七）のものがあるが、これが全面的に太賢の『古述記』に依拠したものであることは注目に値する。善珠には他に『唯識了義燈増明記』四卷（大正六五巻所収）などといった著作も現存するれっきとした法相宗の学僧である。太賢にも『成唯識論学記』八卷（統藏八〇巻）が現存するほどの唯識学の業績があるから、太賢と善珠とは共通性はある。ただ太賢の『古述記』の性格が『華嚴經』と『梵網經』との一体化を極点まで推進し、しかも元曉・法蔵融合の姿勢を持った内容であるから、それを丸写しのように引用して著述した善珠の教学の正体が問われることにならざるをえない。今の私にはまだ明解なことはいえないが、あるいは先に見た審詳や寿靈などと共通した元曉・法蔵融合形態の教学の日本側の受容者の一人として善珠を認定しうるのかもしれないという密かな予測を抱いている。そのような予測がもしも当たっているとすれば審詳や寿靈は華嚴宗であり、善珠は法相宗に属するといった南都六宗それぞれを別々にバラバラに見てゆくことでは不十分であり、南都六宗あるいはもっと広く南都仏教界全体の動向に共通する面として認識を深めてゆかなくてはならない。

### 三 南都仏教の再検討

まさに先に述べたことは最澄（七六七—八二二）や空海（七七四—八三五）が入唐以前にどのような留学をなしたかを知るために必要な姿勢である。唐から渡来した道璿（七〇二—七六〇）のもたらした教学を行表（七二二—七九七）を通して学んだ最澄は華嚴の法蔵の著作に因って天台教学を学ぼうと決意したと言われ、また事実彼の著作の内容から彼がいかに華嚴への造詣が深かったかが知られる。

また空海は三論宗の勤操（七五八—八二七）について出家受学し、入唐して不空（七〇五—七七四）の門下の惠果（？—八〇五）に就いて真言宗を伝えた。彼の『十住心論』を見ると真言宗を至上の教えとしつつも華嚴や天台など南都の諸教学を彼一流の見識で総括していることが理解される。

ところで、今空海の『十住心論』に言及したが、これは天長七年（八三〇年）に一応取りそろえられたといわれる、いわゆる「天長勅撰六本宗書」の一つの著作である。私はこれらの「六本宗書」は南都仏教の一つの総決算とも見なすことができるのではないかと考えている。そして、これらの「六本宗書」以前及び同時代の文献を整理し、解説しながら南都仏教の教学的特色をさぐってみたいと思っている。これまで先学によって様々に議論が深められてきているので、それらを参照しなくてはいけないが、私はたちまちは私が出した元晁・法蔵融合形態の教学にこだわってみたいと思っている。

このように南都仏教を再検討してゆきたいと思っている私にとって最近刺激を与えて下さる論文が二つ出た。一つは石井公成氏の「聖武天皇の詔勅に見える願と呪詛」〔華嚴学研究〕第三号、一九九一年五月）である。石井氏は聖武天皇の国分寺創建の勅文や大仏建立の詔勅文、さらに「華嚴経為本の詔」と称されるものなどを細かく分析検討し、一般的には華嚴信仰として一括されやすい聖武天皇の信仰の中心は実は伝統的な神祇信仰と深く結びついた『最勝王経』への信仰、四天王による護国仏教への信念で一貫していることを論述している。私はこの石井論文に刺激を受けて、いずれ東大寺明一（七二八—七九八）、大安寺常騰（七四〇—八一五）、平備（一七六三—）、さらに元興寺

願曉（一八七四）などの一連の『金光明最勝王経』の諸注釈書を読んでみたいと考えている。

もう一つの論文は末木文美士氏の「日本法相宗の形成」〔佛教学〕第三二号、一九九二年三月）である。この論文の中で末木氏は日本への法相宗の伝承説を再検討し、行信の『仁王般若経疏』を分析し、さらに善珠の教学に言及しながら、当時のいわゆる法相宗の学問が一般的にいわれる正統中国法相宗の三祖（基、慧沼、智周）一辺倒のものではなく、唯識の異流といわれる円測の学説や、また学派的には対立関係にあったと思われる三論などの諸説をも自由自在に取り入れて解釈してゆく、のびやかなものであったことを論じられている。この末木氏の論文を読んで感じることは、我々の南都仏教への視点が凝然の『八宗綱要』などによる歴史意識に深く影響されているのであろうという反省である。凝然の伝承も尊重しないわけにもゆかないが、これからはそれは一つの伝承とぐらいに考えて、もっと生な文献に接して考察してゆくことが大切であろう。その点で、これから善珠の研究を進めたいと思っている私に対して末木氏の論文は啓発を与えて下さった。

#### 四 太賢の教学の解明

これから私は八世紀の東アジアの仏教の動向を教学の面から解明したいと思っている。これはこれまで述べてきたように私の法蔵研究からの必然性であり、また日本仏教の中で南都の仏教は原点といってもよい程であり、私の関心をそそってやまない。そして、南都の文献を読めば読むほどきつと新羅の七世紀から八世紀にかけての仏教の質と量の大きさに気付いてゆくことになろう。これまで私が管見しただけでも審詳、寿靈、善珠、そして入唐して天台法華宗を伝えた最澄においてすら新羅の仏教の影響は大きいのである。これからの検討によって益々新しい交流および攝取の事実が明らかになるだろう。

そこで私自身も八世紀の新羅仏教の研究を進めてゆくが、ともかく現存する著作の量からして太賢が中心となる。

景德王の時代に新羅の仏教がもり上がりを見るが、その中心人物の一人として太賢を認定してよいであろう。私はこれまであまり研究されていない『成唯識論字記』の分析解説に着手した。この文献ではさすがに法蔵は引用されていないが、ともかく基と円測との引用、それも並列的引用が目に着く。両者の間には水と油ほどではないにしても淡水と海水ぐらゐの相違が存在することはよく言われることであるから、それらが無批判的に並列して引用しているとすると、前に述べた元暁と法蔵とが何のことわりも無くモザイク的に並べられていたのを見た時と同様の驚きを感じるのではあるまいか。

そして、太賢の教学を見る時は必ず日本の善珠など法相宗の人々の著作にも眼をくばることにしたい。例えばいずれ太賢の『本願薬師經古述』二巻をも解説してゆくが、これについても善珠の『本願薬師經鈔』二巻（日本大蔵經第九卷・經藏部・方等部章疏四）を参照しつつ研究を進めてゆくことになる。

## 五 均如の著作の活用

もちろん、太賢の研究のためには彼以前の円測、元暁、義湘、義寂、そして道証など主として新羅仏教の人々の現存の著作をきちんと把握し、また太賢以降の例えば表員や見登などの著述をもしっかり検討しなくてはいけないことは明らかである。しかし、何としても全体的には残っている文献が少ないことも事実である。そこで一つには日本の南都から平安にかけての諸文献から新羅系の仏教資料を集めて、新羅仏教の解明に役立ててゆく方法がある。

そして、他の一つの方法として高麗朝の初期に活躍した均如（九二二—九七三）の著作を新羅仏教の解明のために活用することも重要であろう。義湘以来の華嚴の法統を主張する均如の教学の解明自体も大きな研究テーマであるが、彼の著作が比較的多く残存しており、またその注釈態度が博引旁証であって、中国から新羅にかけての多くの仏者の著書や言葉を用いてくれているから、我々はそれらのうちで八世紀の新羅仏教の解明のために幾分か役立て

ることができよう。均如の現存の著作五部、すなわち『釈華嚴教分記円通鈔』十巻（教分記と略称）、『華嚴經三寶章円通記』二巻（三寶と略称）、『釈華嚴旨帰章円通鈔』二巻（旨帰と略称）、『十句章円通記』二巻（十句と略称）、『一乘法界図円通記』二巻（法界図と略称）に出ている人名や書名などをそれぞれの著作に出ている回数だけで表示してみたので参考にしていただきたい。<sup>(9)</sup>

以上、この小論はこれから私が研究してゆきたい八世紀の東アジア仏教についての問題点のみの点描になってしまった。ともかく東アジアとはいっても中国は中国なりに、新羅は新羅なりに、また日本は日本で独自の歴史的展開をしているながら、日本の八世紀仏教にとっては唐と新羅の仏教は大切な宝庫であったと言わねばなるまい。

## 注

- (1) 普機『華嚴宗一乘開心論』巻下に「青丘留学華嚴審詳大徳」（大正七二巻一三頁下）とあるに拠る。
- (2) 堀池春峰「華嚴經講説より見た良弁と審詳」（『南都仏教史の研究』上「東大寺篇」所収、法蔵館、一九八〇年九月）
- (3) 因みに石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』（東洋文庫、一九三〇年五月）に拠れば、太賢の著作の初出は天平十七年（七四五年）であり、表員の『華嚴經文義要決問答』は天平勝宝三年（七五一年）であるから、これらの文献の存在については審詳は十分に認識していたであろう。ともかく、審詳の青丘留学は天平年間初期（七二九—七三九）であったことであろうが、あるいは審詳が帰国してから太賢の著作活動が盛んとなり、それが天平年間の後半（七四〇—七四九）にもたらされたとも考えられよう。どう考えても審詳が入唐し、法蔵（六四三—七一七）に受学したという説は、年代的にもまた「審詳師経録」の圧倒的な新羅仏教文献の様相から判断しても、日本の後代の一つの虚構の伝承と言わざるをえないだろう。もちろん、審詳も新羅から多くの法蔵の文献を将来したのであるが、それよりも道璿（七〇二—七六〇）が天平八年（七三六年）に日本に渡った時に各学派の文献と共に法蔵の著作も多く将来したことの方が意義が大きい。道璿はその年代からして法蔵の弟子たちに受学した可能性もありえよう。

- (4) 寿靈『華嚴五教章指事』巻上本に「又此土古徳訓僧都等、名高一朝、学普六宗、近受詳法師、遠依蔵法師、伝彼一乘宗、八世紀東アジア仏教研究への展望

- (大正七二卷二二頁下)とあり、慈訓や審詳を自らの拠所とする。
- (5) 高原淳尚「寿靈『五教章指事』の教学的性格について」『南都仏教』第六〇号、一九八八年二月)の「三元曉説依用」にみる問題」を参照していただきたい。
- (6) 蔡印幻『新羅仏教戒律思想研究』(国書刊行会、一九七七年七月)「日本における古述記の研究」(四一八頁以下)を参照。
- (7) 拙稿「華嚴教学への最澄の対応について」(『華嚴学研究』創刊号、一九八七年三月)を参照していただきたい。
- (8) 金知見『均如大師華嚴学全書』三冊(後楽出版、一九七七年一月)に収められている。
- (9) 均如の著作に引用される人名や書名などの一覧表

No.	人名	生 歿 年	書 名 ・ 事 項	教分記	三 宝	旨 帰	十 句	法界図
11	智 延	?	?	1				
10	真 諦	四九九一五六九	?	3				
9	惠 明	五三一—五六八	詳玄賦	1				
8	慧 光	四六八—五三七	華嚴經疏	5	1	1		1
7	仏 陀	?	?	1				
6	崔 光	?	十地經論序	1				
5	法 雲	四六七—五二九	?	4				
4	菩提流支	?—五二七	?	1	1	1		3
3	劉 虬	四三八—四九五	?	1				3
2	鳩摩羅什	三四四—四一三	?	1	1			1
1	釈道安	三二二—三八五	?					

29	玄 奘	六〇二—六六四	?	4				
28	法 敏	五七九—六四五	?	1				1
27	法 常	五六七—六四五	撰大乘論疏	6	1			1
26	杜 順	五五七—六四〇	法界観門	1				
25	灌 頂	五六一—六三一	?	1				1
24	靈 裕	五一八—六〇五	?					
23	智 顛	五三八—五九七	摩訶止観	2	1			
22	智 顛	〃	?	5				3
21	〃	〃	十地義記	3				
20	〃	〃	涅槃義記	1				
19	〃	〃	大乘義章	5				
18	〃	〃	華嚴經疏	4				
17	慧 遠	五三一—五九二	?	1				
16	安 廩	五〇九—五八三	?	1				
15	曇 衍	五〇三—五八一	?	1				
14	慧 思	五一四—五七七	?	2				
13	護 身	?	?	1				
12	智 延	?	?	1				

65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48
神秀	惠詳	復礼	“	文超	慧苑	閻朝隱	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“
?	?	?	“	?	?	?	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“
妙理円成観	弘賛法華伝	?	遺忘集	文超集	刊定記	法蔵碑文	?	寄相徳書	華嚴経伝記	起信別記	起信論疏	十二門論疏	金師子章	法界義海章	華嚴綱目	遊心法界記	妄尽還源観
7	1	1		6	1	1	6	1	2	3	16	1	2		4		
1				4	2				1		1						
2			1		4			1	4					3	1	1	
							12										
							11						1		1		1

47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30
“	“	“	“	法蔵	実叉難陀	懐素	円測		“	“	“	“	“	“	“	智儼	道世
“	“	“	“	六四三—七二二	六五二—七二〇	六二五—六九八	六一三—六九六	“	“	“	“	“	“	“	“	六〇二—六六八	?—六六八
別行三寶章	三寶章	旨帰章	五教章	探玄記	?	四分律開宗記	唯識疏	?	一乘十玄門	起信論疏	無性釈撰論疏	入法界品抄	十句章	孔目章	五十要問答	搜玄記	諸経要集
	10	13		107	1		9	24	6	1	1	5	20	46	14	33	
4		5	16	13									3	3	2	2	2
	3		28	67				1	1			1	7	8	3	9	
	1		15	8				10						11		4	
	4	1	37	15		2		7	11			1	7	7	2	9	



101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84
真定	悟真	表訓	"	"	"	智通	道身	回濟	太賢	"	"	義湘	"	"	"	"	"
?	?	?	?	"	"	?	?	?	?	"	"	六二五—七〇二	"	"	"	"	"
?	?	?	?	錫洞記	智通問答	智通記	道身章	儼師行狀錄	仁王經古迹記	?	大乘章	一乘法界圖	?	中辺分別論疏	起信論疏	金光明經疏	華嚴宗要
1		1	1	1	2	6	32		1	22		30	13	1	1	1	1
		2					2					2	1				
	1	1	1		3	1	13			4		6					1
		4			1		3			19		7	1				
					1		6	2		11	1	1					2

83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66
"	"	"	"	元曉	勝詮	"	宗密	"	"	"	"	"	"	澄觀	"	"	"
"	"	"	"	六一七—六八六	?	"	七八〇—八四一	"	"	"	"	"	"	七三八—八三九	"	"	"
涅槃宗要	二障章	一道章	普法記	和諍論	?	行願品抄	行願品記	?	玄談	華嚴經略策	法界玄鏡	行願品抄	演義鈔	華嚴經疏	?	他化自在主伴無碍觀	果徳依正難思觀
4	2	3	1	4			1	15					21	12	1		
1								1			3		15	7			
					1	1		26		2		2	13	5		1	
								2					2	1	2		2
			1					8	1	1			2	2			

137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120
懷	普	義	大	令	常	員	功	道	晋	伽	純	論	法	体	融	党	融
?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
?	?	義景鈔	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
		1		1	1				1	1	1	1			1	1	2
1																	
	1						1										1
			1			1						1	1	3			
						1											

119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102
相	嵩	法	良	了	靈	決	将	神	〃	神	梵	融	智	融	生	崔	義
元	業	雄	円	源	観	言		琳		廓	体	質	積	咄		致	寂
?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	〃	?	?	?	?	?	八	?
										無性撰論疏	?	?	?	?	?	五	
1	2				3	8	9	10	4	6	2		1	1		七	1
								2								九	
	1		1	1				4							1	〇	
1	2							6		4	10	1	2			四	
			1	2				1									

155	成実宗	?	?																	
154	毘曇宗	?	?																	
153	古義	?	?		1															
152	古辭	?	?		17															
151	古徳	?	?		1															
150	古人	?	?		9															
149	古	?	?		1															
148	?	?	?								唯識疏									
147	?	?	?								五十卷經疏									
146	?	?	?								四卷疏									
145	?	?	?								達摩碑									
144	?	?	?								元常録									
143	大正角	?	?																	
142	綸迥	?	?																	
141	綸綸	?	?																	
140	行遠	?	?																	
139	傳	?	?																	
138	靈炬	?	?																	

165	均如	九三一九七三	三卷章円通抄																	
164	法相学人	?	?																	
163	新法相人	?	?		1															
162	新法相	?	?		1															
161	法相家	?	?		3															
160	法相人	?	?		5															
159	古法相人	?	?		1															
158	古法相	?	?		1															
157	真諦宗	?	?		1															
156	三論宗	?	?		1															

以下、ナンバリの順で目録などへの記載の有るものについて若干のコメントを行う。17 『義天録』（大正蔵五五巻所収、以下ではカッコは取る。）巻一に「華嚴經疏八卷或四卷、慧遠述、弁相統修」とあり。36 義天録卷三による。37 義天録卷三に「起信論義記一卷」と「起信論疏一卷」とを智儼の著作とする。38 一乗十玄門は智儼の真撰ではないと考えるが、今は伝承に従う。41 義天録卷二に「開宗記二十卷、拾遺鈔一卷、以上、懷素」とあり。43 法蔵の著作の中に真偽の議論の余地のあるものが多いが、今は伝承に従う。62 義天録卷一に「自防遺忘集十卷、文超述」とあり。65 法鏡門下、澄観と同門の会稽の神秀。90 崔致遠の書いた義湘伝に出るか？ 93 義天録卷一に「儼尊者行状一卷、回济述」とあり。『華嚴經伝記』卷三の「智儼伝」（大正五一巻一六四上）に出る、智儼の門人の一人懷济と同一人か？ 94 『宋高僧伝』『義湘伝』（大正五〇巻七二九中）では「道身章」となっている。しかし、『円通鈔』では「道申章」が多く出る。97 『宋高僧伝』『義湘伝』には「錐穴問答」と出る。『法界図叢録』に出る「錐穴記」も同じ書物か？ 因みに『叢録』には均如の著作が引用されるので、彼よ

り後の成立ではあるが、この文献に引用される書名や人名がかなり均如の引くものと重なっていることを付記し、この文献の活用も重要であることを申し添えたい。109 義天録卷三に「無性釈撰論疏十四卷、神廓述」とあり。131 あるいは表員のことか？ 135 通倫『瑜伽論記』（大正四二卷）よりの引用か？ 145 「梁武帝御撰達磨大師碑頌」（統感一一〇卷所収）165 『華嚴一乗教分記』は三卷であるから、『教分記円通鈔』のことか？

駒澤大学国際仏教学会発表要旨

## 韓国仏教・禅の自然観と現代の諸問題

蔡 印 幻

韓国、ソウル、東国大学教授・文博  
 佛教文化研究院院長 CHAE TAEG-SU

一

古代の韓民族には共通して天を崇信し、神に祈祷する信仰があった。すなわち、日月神を信仰の対象となし、特に朝日の鮮明なる現象等の自然を崇拜する固有信仰があり、原始社会以来から自然の靈威に信服する信仰が一般的にひろく浸透していたのであった。地形的にも平野が少く山岳地帯の多い韓半島においては原始の頃から自然と山岳信仰が大きな意味をもつようになるのであるが、山岳信仰にあっては万物を包含する意味での閉鎖的世界と、そこから生まれる智慧の意味での開放的世界が同時に存在することになり、そこで開放的世界を象徴するのは多くの場合に光の源であるところの太陽であるとするとそこから来た信仰形態であった。このように仏教を受容する以前の固有信仰が崇天祖靈の信仰から人格神的先祖崇拜へと発展する過程の原始農耕社会において仏教が伝来されたのであった。

韓国の仏教史上において最も現実的な信仰として早くから一般に深く根をおろした仏教思想は浄土信仰思想であっ